

# Y 国 語 問 題

## 注 意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべてHBの黒鉛筆またはHBの黒のシャープペンシルで記入することになっています。  
HBの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。  
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は16ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。  
なお、問題番号は1〜3となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
- 六 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷ついたりしないように注意してください。
- 七 この問題冊子は持ち帰ってください。

### マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

- 一 マークは、左記の記入例のようにHBの黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
- 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
- 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しきらずはきれいに取り除いてください。

マーク例

①
0 1 2 3 4 5
0 0 ● 0 0

(3と解答する場合)

一 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

宗教的な信仰の本質をどのように捉えるのかについては、実に様々な立場がある。『信じる意志 (The Will to Believe)』という著作を著したウィリアム・ジェイムズ(一八四二—一九一〇)のように、「意志」を軸に信仰を捉えようとする立場もあれば、『信仰論』を著したシュライエルマッハー(一七六八—一八三四)のように、「神への全き依存感情」のうちに宗教的信仰の本質を捉える立場もある。

このように多様な諸々の立場のなかにトマス(注1)の信仰論を位置づけるときに極めて特徴的なのは、彼が「感情」や「意志」ではなく「知性」を軸にした信仰論を展開しているという点だ。トマスにとって、「a」とは、絶対者に対する依存感情を抱いて安心するとか、意志的にとにかく決断するところと本質があるのではない。何よりも「b」に関わるものであり、さらに言えば「b」の固有対象である「c」に関わるものなのである。トマスの信仰論においては、「d」も極めて重要な役割を果たすが、あくまでも「b」が軸になったうえで、「b」と「d」とが協働するという話になっている。

トマスは、「信仰」について考察するさいに、しばしば、宗教的な信仰以外の場面での「信じること」を手がかりにしている。典型的なのは、他者(1)(人間)を信じるという場面である。人間を信じる場合には、「信仰」という日本語を使うことはできず、「信じること」とか「信頼」という言葉を使うのが自然だ。だが、ラテン語では、「信仰」も「信頼」も、*fides*フェイスという一つの名詞で表現することができる。日本語でも「信」という単語で神に対する「信仰」と人間に対する「信頼」を合わせて表現することもできるだろう。トマスは、『ボエティウス三位一体論註解』第三問題第一項(2)において、「人類にとつて信は必要なものであるか」という問いを立て、次のように述べている。

人間の共同生活においては、一人の人が、自分では充分でないものにおいては、他の人を自分自身のよう

に用いることが必要であるから、他の人は知っており自分自身には知られていないものに対して、自分自身が知っているもののように依拠しなければならぬ。それゆえ、人間の交わりにおいては、一人の人が、他の人の言明をそれによって信じる<sup>(1)</sup>ところの信 (trust) が必要なのである。そして、キケロが『義務論』<sup>(注3)</sup>のなかで述べているように、これが正義の土台なのである。こうしたわけで、どのような嘘も罪なしには存在しない。というのも、いかなる嘘によってもこれほどまでに必要な信が損なわれるからである。

「信じる」という行為を、我々は、何か特別な場面においてのみ立ち現れてくるものとして捉えがちである。

<sup>(1)</sup>この宗教を信じていいのだろうかとか、このうまい投資話を信じていいのだろうかというように、人生の大きなキロで決定的な決断を迫られたときに直面するのが「信じる」か「信じない」という選択だと考えがちだ。トマスがこのテキストにおいて為しているのは、「信じる」ということが、そのような特殊な場面においてのみではなく、人間の共同生活全体において極めて基本的で不可欠な役割を果たしているという事実の指摘である。

「人間の共同生活においては、一人の人が、自分では充分ではないものにおいては、他の人を自分自身のように用いることが必要である」とトマスは述べているが、我々の生活において、自分だけで充分だというのは、極めて限られていると言ってよいだろう。生きていくために必要な食料にしても諸々の道具にしても、自分だけで充分に用意できるものなどほとんどないと言って過言ではない。

そのなかでも、とりわけ自分だけでは充分ではないのは「知識」<sup>(3)</sup>である。特に現代のような情報社会においては、生きていくために必要な知識のうちの大部分を我々は他者に依拠している。我々が直接的に経験して知っている事柄というのは、この社会のなかのごく一部の事柄にすぎない。新聞やテレビやインターネットを通じて触れる情報が我々のこの社会についての認識の大半を形成していると言っても過言ではない。我々は、いわば、これらの情報を「信じる」ことによって社会について「知っている」のだ。ときに我々は、あるニュースが間違っていたとか、誰かが意図的に流した嘘の情報に基づいていたという事実の後から気づかされることがある。そう

すると、我々は、嘘または誤りを信じてしまっていたことに気づく。

だが、時に嘘や誤りを事実として信じてしまうことがあるとしても、それを防ぐために、他者が伝えてくる知識や情報を全く信じずに、自分が直接的に経験して知っていることや、論理的に必然的な推論に基づいた数学的真理のようなものしか認めないとしたならば、我々は、この世界についての極めて断片的で一面的な知識しか持てないことになってしまいうだろう。

また、自分が直接的に経験することのできる範囲の事柄に関しても、「信」なしで生きていくことはできない。我々が接する一人ひとりの言っていることが本当かどうか確実には分からないからといって、一つひとつの言葉を疑っていたのでは、その人がどういう人物なのか、全く見えてこないだろう。とりあえずその人の語る言葉を大筋において受け入れたうえで、その内的整合性や現実認識の妥当性を全体として問題にするのがより適切なやり方だろう。

友人や恋人のような特別に親しい関係においては、相手を信じて深く付き合うことよって初めて見えてくる相手の真の姿というものがある。完全に信じてできないからといって距離を置いて接しているのでは決して見えてこない、それぞれの人の人柄の深みがある。相手がきちんとした人物であると確実な仕方で証明されない限りその人を信じないというのでは、親密な人間関係は成立しない。誰も信じずに孤立して生きていけば、騙されたり嘘をつかれたりすることもないから安全かといえば、そんなことはない。苦境に陥っても誰にも相談することもできず、喜び悲しみを共有することもできず、むしろ、この世界において安全に幸せに生きていくことの根幹が揺るがされてしまうだろう。この世界には、絶対に確実でなければ信じないというのでは失われてしまう実に多くの事柄があるのだ。トマスがこのテキストにおいて為そうとしているのは、このような仕方で「信」というものが、人間が生きていくうえで、いかに不可欠なものであるかという事実の指摘だ。

「信じる」ということは、「知る」ことと対立したり矛盾したりするのではない。むしろ、「信じる」ということと自体が、「知る」ことの一つの在り方であり、また、何かを深く「知る」ための大前提ともなる、というこ

た事実をおさえておくことは、トマスの信仰論を的確に理解するために非常に大切である。我々は、しばしば、「信じる」ということと「知る」ということを過度に対立させ、「信じる」ということは不合理な営みだと捉えがちだ。たしかに、この世界には、「不合理な信」というものがしばしばある。だが、反対に、「不合理な不信」とでも呼ぶべきものがあることを、他者に対する極端な不信や、メディアを介した情報を完全にシャットアウトすることによる孤立という右記の事例は指し示していると言えよう。

常に他者を疑い、確実な証拠なしには誰のことも信用しないという人がいたとすれば、その人は、理性的で健全な判断の持ち主と見なされるのではなく、むしろ、カジヨウで不合理な疑いに陥ってしまった不健全な人物とみなされるであろう。「信じる」ということは、宗教的信仰のような特殊な場面においてのみ必要となる事柄ではなく、我々の日常的な生を支える極めて基礎的で不可欠な要素として常に機能しているのだ。

(山本芳久『トマス・アキナス 理性と神秘』による)

(注)

- 1 トマス——トマス・アキナス(一二二五頃～一二七四)。イタリアのスコラ学の哲学者、神学者。
- 2 ボエティウス——中世初期のイタリアの行政官、哲学者(四八〇～五二五頃)。
- 3 キケロ——古代ローマの政治家、弁論家、哲学者(前一〇六～前四二)。

問

(A) 線部(イ・ロ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書で記すこと)

(B) 空欄 a ) d ) にはどのような語が入るか。最も適当な組み合わせを次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- |   |   |    |   |    |   |    |   |    |
|---|---|----|---|----|---|----|---|----|
| 1 | a | 真理 | b | 信仰 | c | 知性 | d | 意志 |
| 2 | a | 信仰 | b | 意志 | c | 知性 | d | 真理 |

- 3 a 信仰      b 知性      c 真理      d 意志
- 4 a 真理      b 知性      c 信仰      d 意志
- 5 a 知性      b 真理      c 信仰      d 意志

(C) —— 線部(1)について。トマスが「他者(人間)を信じる」ことを重要と考える根拠は何か。本文中から句読点を含めて六十文字以内で探し出し、その初めの五字と終わりの五字を記せ。

(D) —— 線部(2)について。本文によればトマスがこのように考える理由は何か。最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 人間にとって最も重要なものが友情であり、他人を信じてこそその真の姿が分かるから。
- 2 人間の知識の多くは他者から得るので、信頼が生活の基礎的条件といえるから。
- 3 人間は共同体の構成員として分業に携わるが、実は一人で行い得ることも多いから。
- 4 人間にとって最も重要なものが信仰であり、信じることはまさにその基礎だから。
- 5 人間にとって安心して生活してゆくために、社会の安全な制度設計が必要だから。

(E) —— 線部(3)について。ここで言う「知識」とは何か。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 懐疑的な知性に依拠して判断することを通じて個々人が徐々に習得するもの。
- 2 独断によらずに他者との信頼関係を築くことを通じて獲得されるもの。
- 3 個々人が感覚や感情に知性をゆだねる経験を積み重ねることによって蓄積されるもの。
- 4 他者への信頼という不合理な行為を合理化することによって深化するもの。
- 5 他者を利用して互いに足りない部分を補い合うことによつて豊かになるもの。

(F) —— 線部(4)について。次の各項について、こうした「知る」ことの在り方の具体例として合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ ある政治家の無責任な発言が社会を混乱させているとの新聞記事を読み、今後の政治のあり方について考えた。

ロ 最近の社会動向や話題について、インターネット上の個人ブログやソーシャルネットワークから得た情報を参考にすることが多い。

ハ 美術館などで美術作品を鑑賞する際には、予備知識もなしに虚心に作品とじっくり向き合い、何からも影響されない、自分だけの感じ方を重視している。

ニ 最近の天文学や物理学を概説する本を読んだところ、今、ここにいる自分が見たり考えたりしていることが宇宙や自分の本当のあり方とは全く異なるという、新しい視点を持った。

ホ ハイキング中にはぐれ、正しい登山道にたどり着こうとした際、強まる遭難に対する恐怖心を抑制することとは困難だとわかった。

(G) 次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 「信じること」は、人間が社会生活を送る前提条件であり、それなしには社会そのものを構成することができない。

ロ 人は知性を通じて外界や他者と交流するが、知性には限界があるためにあらかじめ嘘や間違いを避けることが困難だということには注意しなければならない。

ハ トマスの思想においては、人間関係のあり方、個人の幸福、これらとも関わる知識全般は、「信」なしには成立しえないと捉えられている。

ニ トマスの思想においては、真に実りある人間関係を構築し、物事を深く探究するための基礎として「知」が重視されている。

ホ トマスの信仰論の特徴は、日常生活に根差した卑近な事実を出発点にして宗教的な考え方の超越性をわかりやすく浮き彫りにすることにある。

二 左の文章は『戦争の文学』（東都書房）という文学作品集の解説として書かれたものである。これを読んで後の設問に答えよ。（解答はすべて解答用紙に書くこと）

戦争の文学を書く者にとって、まず第一に考えることは、どこに視点を置くかという問題であろう。戦争とか軍隊という余りに巨大な怪獣をどの視点から見るか——それに直接、参加した者の眼から見るか、それともその外側にあつた人間の眼から客観的にこれを捉えるべきか、指揮者の立場から見るか、一兵士の立場から見るか、それによつて「戦争」の捉え方や性格はやはり少しずつ違つてくる。

その点、ここに収められた作品の大部分は、一つの共通した特色を持つている。それは兵士の視点から、戦争もしくは軍隊を見ているという点だ。兵隊は言うまでもなく、軍隊にあつてはもつとも底辺に属する階級であり、消耗品であるゆえに、もつとも被害者であり、また決して職業軍人ではない存在である。

兵隊は戦争や軍隊を高めから見ることができない。彼はその中でゴツかれ、踏まれることによつて人間がこういう世界、こういう組織のなかでどう変貌するかを身をもつて味わわされる。

軍隊というものは、その国の社会組織や、その国民の弱点をもつともロテイする場所である。だからノーマン・メイラーの『裸者と死者』はたんなる戦争や軍隊の形相を描くだけではなく、アメリカとアメリカ人の悲劇に迫つているのである。

もつとも小さな内務班<sup>(注1)</sup>、もつとも小さな分隊にさえ、さまざまな社会的階級と職業とを持った人間が集まつてくる。彼らは士官学校や兵学校で職業的軍人となるために同じ過去、同じ経歴、同じ心理、同じ考え方を持つよう訓練された将校たちとちがう。ある者は過去において小作農であり、ある者は会社社員であり、ある者は製鉄会社の工員であり、ある者は保険屋である。あるものは学生としていわゆるインテリ階級に属し、ある者は生れながら、いわゆる労働者階級という過去を持つている。彼らは内務班のなかでは共に「兵士」というレッテルのもとにそれら社会的な階級を捨てたように見えるが、しかしその心理においては昔を背負つてゐる。そこに古兵と



新兵との関係がつけ加わる。こうして成立する一内務班はいわば日本社会の小さなむきだしの世界なのである。あるいは日本人が独得の心理をさらけ出す場所なのである。

第二に軍隊という世界は、一般社会とはカクゼツ<sup>(1)</sup>している。そこでは、いわゆる一般社会で通用した外面的な約束、外面的な礼儀作法、外面的な道徳はいつさい通用しない。彼らの第一目的はいい兵隊になることであり、いい兵隊とは結局において敵を殺す兵隊なのだ。殺すことを正当化しうる場所は現代においては軍隊しかありえない。小島信夫氏の『小銃』に一人の女を射ち、それを銃剣で突くことを命ぜられる兵士がでてくるが、それがこの世界では正当なことなのだ。わかりきったこととはいえ、昨日までいわゆる市民社会のモラルで育った人間が、この内務班に一步入るといことは、銀行員が貿易社員になるといことはちがう。八百屋が魚屋になるといことはちがう。<sup>(2)</sup>それは人間として変貌することを要求されるのである。したがって、兵士の世界を書くということは、とりもなおさず軍隊の組織のなかで、この変貌がどういふものかを書くことになる。

この閉じこめられた世界で、人間はどうなるのか、外面的な道徳や装飾を棄てさせられ、どんな赤裸々な姿をむきだしにするか。そのむきだしのエゴイズムとはどんなものか。その際、何だけが確かなもの、真実なものとして残るか——そういう人間変貌を知る一番よい視点は、やはり兵士の視点だと私は思う。

以上、のべたところを整理すると、兵士の立場から軍隊や戦争を描いた小説は、多かれ少なかれ、次の二つのテーマをその底に持っているのである。

- (1) 軍隊、もしくは戦争を描きながら、同時に日本の社会組織及び日本人とは何かという問題に迫る作品
- (2) 軍隊もしくは戦争という極限状態におかれた時、人間はどう変るかという問題に迫る作品

もちろん、こうした観点だけから、これらの小説を読まれるよう、私は読者に言っているのではない。だがこれらの小説を読むと読者にはそれぞれのヴァリエーションにもかかわらず、この二つの問題を避けて通るわけにはいかないだろう。これらの小説だけではない。たとえば、安岡章太郎氏の『遁走』のような作品を一例とすると、最後に出てくる大陸の黄塵<sup>こうじん</sup>の場面は書きこみが足らず、その意を読者によく伝えているとは言えないが、作

者の意図は、あの黄塵によって覆われた何とも言えぬ曖昧さのなかに、日本人と日本社会の本質を象徴させたかったのだと思う。野間宏氏の『真空地帯』がたんに軍隊の内務班を描くだけではなく、(1)と(2)とのテーマを底に持つていることは、もはや説明を要するまでもあるまい。

したがって、私は□□と思う。戦争の文学とは結局、戦争や軍隊という場をかりて「日本人とは何か」「人間とは何か」を問う文学のことであり、これらは結局、文学本来の主題にすぎないのである。したがって、戦争文学がもしこの問いにまで迫っていないのなら、それは御用文学なのか、あるいは単純な反戦文学か、あるいは文学作品というより記録にちかひものにはすぎないのだと私は思う。いかなる反戦小説でさえ「日本人とは何か」「人間とは何か」に迫っておらず、たんなる意図だけで生まれたならば、真の戦争文学の名に値しない。私はだからある種の反戦小説を文学としては認めることはできないのである。

(遠藤周作『狐狸庵読書術』による)

(注) 1 内務班——旧日本陸軍で、兵管内で生活する際の最小単位。二〇〜四〇人の兵士を班長である下士官が統率した。

2 士官学校——各国の軍隊において士官(将校)を養成する軍学校。

## 問

(A) 〓 線部(イ)・(ロ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書で記すこと)

(B) 〓 線部(1)について、なぜそう呼ぶのか。その含意の説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 もつとも底辺に属する兵士を翻弄し、無慈悲に蹴散らすから。
- 2 高みから小さな人間に襲いかかる、獐猛な動物にたとえられるから。
- 3 為政者が自らの目的達成のために創りだした恐ろしい装置だから。

- 4 勝利のために、手段を選ばず自然や人を傷つけるから。
- 5 見る者によって形相を変える化け物のような存在だから。

(C) ——— 線部(2)について。その具体例として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 銀行員が八百屋に、貿易社員が魚屋になること。
- 2 温厚な貿易社員が冷徹な銀行員になること。
- 3 信仰心の薄い工員が兵舎で神仏を拜むようになること。
- 4 従順な小作農が同じ兵卒となった大地主にたてつくようになること。
- 5 模範的な会社員が占領地で略奪を行うようになること。

(D) 空欄  にどのような文章を補ったらよいか。最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 戦争文学とはこの二つの視点から読み解くべきなのだ
- 2 戦争文学とは日本の文壇の最重要ジャンルなのだ
- 3 戦争文学という特殊なジャンルはないのだ
- 4 戦争文学こそ人間変貌にせまるジャンルなのだ
- 5 戦争文学はあつてはならぬジャンルなのだ

(E) ——— 線部(3)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 軍隊が日本社会の縮図であることを描いた小説。
- 2 道徳的な市民を残酷な兵士に変貌させた戦争を糾弾した小説。
- 3 戦争でもっとも苦しむ一般市民を題材にした小説。
- 4 戦争に反対すること自体を目的として書かれた小説。
- 5 兵士の証言をもとにしたノンフィクション。

(F) 次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ ノーマン・メイラーの『裸者と死者』は、戦争や軍隊を題材にアメリカとアメリカ人の悲劇を描いた点で、すぐれた戦争の文学といえる。

ロ 軍隊においては、小作農も会社員も工員も学生も、もつとも底辺に属する階級の「兵士」となる。

ハ 筆者は御用文学という言葉を使って、単純な反戦文学や、記録作品をさしている。

ニ 市民社会のモラルで育った人間であっても、軍隊の中でコヅかれ、踏まれ、自身の変貌を身をもって味わわれる。

ホ もつとも小さな内務班や分隊にさえ、さまざまな社会的階級と職業とを持った人間が集まってくるが、彼らは共に「兵士」というレッテルを貼られた瞬間から、そうした社会的階級を捨て去ることになる。

三 左の文章は、『住吉物語』の一節で、中納言が亡き妻との間の娘である対の君を入内させることについて、北の方(継母)に相談するところから始まる。これを読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

かくしつづ明かし暮らすほどに、九月にもなりぬ。中納言、北の方にのたまふやう、「行く末は知らず、二人の女はありつきぬ。(1) この対の君を、今年(注2)の五節に内裏へ参らせばやと思ふなり。同じ御心ならぬ、心憂さよ」とのたまへば、継母、わが子たちに思ひまし給へるを、ねたしと思ひながら申すやう、「なかなかおぼえ少なき宮仕へよりも、時めく上達部(注3)などにあはせ給へかし」とのたまへば、中納言、「なみなみならむ人には、見せむ事はあらじとて」などのたまへば、継母、「ともかくも計らひにてこそ」と言ひながら、継母ともに當む気色にて、下には、「いかにしてあやしき名を立てて、思ひ疎ませむ」とおぼしけり。

中納言、霜月のことなれば、このことのみ急がるに、わが子どもにはまさりてあらむことをそねみ、「1 人笑はれ草になさむ」と思ひ、人静かなる時に、北の方、中納言に聞こゆるやう、「申せば憚りあり、申さねばうしろめたきことなり。この対の君をも、わが女たちにも劣らずすぐれてもおはせよかしと、人知れず思ひ侍るに、この八月よりのことをつゆほども知らずありつることの心憂さよ。2」とて、さめざめと泣きければ、中

納言、「こは何ごとぞ。3 いかにいかに」と問ひ給へば、「六角堂とかや、あさましき法師、姫君のもとへ通ふなる。この暁も、寝過ぐしけるが、対の格子を放ちて、人の見るともなく出でにけること(注5)の心憂さよ」とて、4 もし偽りならば、仏・神も御覽ぜよ」とげにげにしくのたまへば、中納言、「5 女房たちの中へぞ通ふらむ」とのたまへば、「中の格子を放ちて出でけると申す。上の空なることをば、いかで御耳に入れ候ふべき」とのたまへど、まことしくもおぼさず。

継母、三の君の乳母に、心むくつけなりける女房に言ひ合はせつつ、「この対の君を、わが姫君たちに思ひまし給へることを、ねたきことに思ひ、とかく申せども叶はねば、いかがすべき」とのたまへば、むくつけ女、「われ

らも安からず思ひ参らせつるに、うれしくも」とてささめき合はせて、その後二三日ありて、あやしき法師を語らひ、対に入れ置きて、イに聞こゆるやうは、「偽りとしておぼしたりしに、ただ今かのロ出づるを御覧じ候へ」とのたまふに、「ふしぎや」と見給へば、出でにけり。「あなあさましや。幼くて母に遅れ、また乳母さへはかなくなりしかば、あはれ、果報悪き者と思ひながら、心憂や」とて入り給ひぬ。ハし得たる心地して、むくつけ女もなつみ合へり。

(注) 1 二人の女——北の方(継母)が生んだ二人の娘たちのこと。

2 五節——陰曆十一月、新嘗祭・大嘗祭の時に朝廷で行われた、五節の舞を中心とした行事。

3 上達部——公卿の異称。大臣・大納言・中納言・参議および三位以上の者をいう。

4 人笑はれ草——笑われ者のこと。

5 六角堂——京都市中京区に所在。本尊の観音に多くの人々が信仰を寄せていた。

6 三の君——北の方の二人の娘のうちの一。

## 問

(A) ——線部(1)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 健康に育った      2 結婚した      3 成人した      4 宮仕えした      5 美しくなった

(B) ——線部(2)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 あなた(北の方)の娘二人の考えが対立していること  
 2 あなた(北の方)の娘二人の考えと対の君の考えが違っていること  
 3 あなた(北の方)が娘二人と同じ考えではないこと  
 4 あなた(北の方)が私(中納言)と同じ考えではないこと

5 対の君が私(中納言)と考えを異にしていること

(C) 線部(a)と(c)はそれぞれ誰の動作・行為か。最も適当なものを、次のうちから一つずつ選び、番号で答えよ。ただし、同じ番号を何度用いてもよい。

1 中納言                    2 北の方(継母)                    3 対の君

4 二人の女                    5 三の君

(D) 線部(3)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 同席させること                    2 挨拶させること                    3 結婚させること

4 意見を聞くこと                    5 本音を語ること

(E) 線部(4)について。「このこと」の内容として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 対の君を入内させること                    2 北の方を納得させること

3 北の方の真意を探ること                    4 対の君の不満を解消すること

5 対の君の意志を確認すること

(F) 左記の一文は本文から抜き出したものである。これが入る最も適切な箇所を、空欄  1  5 のうちから一つ選び、番号で答えよ。

「よもさる事はあらじ」

(G) 線部(5)の意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 人の道に反する                    2 未練が残る                    3 将来の心配がない

4 気が引ける                    5 気にかかる

(H) 線部(6)について。その具体的な内容を最も端的に述べている一文を本文中から探し出し、初めの三字と終わりの三字を記せ。ただし、句読点は含まない。

(I) 線部(7)の現代語訳を八字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

(J) 線部には、誰の、誰に対する敬意が込められているか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- |                         |                      |
|-------------------------|----------------------|
| 1 北の方(継母)の、対の君に対する敬意    | 2 北の方(継母)の、中納言に対する敬意 |
| 3 対の君の、中納言に対する敬意        | 4 三の君の乳母の、中納言に対する敬意  |
| 5 三の君の乳母の、北の方(継母)に対する敬意 |                      |

(K) 空欄 

イ
---

ハ
---

 に入る語の組み合わせとして最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- |         |         |      |
|---------|---------|------|
| 1 イ 継母  | ロ 法師    | ハ 法師 |
| 2 イ 継母  | ロ 対の君   | ハ 継母 |
| 3 イ 中納言 | ロ むくつけ女 | ハ 法師 |
| 4 イ 中納言 | ロ 法師    | ハ 継母 |
| 5 イ 中納言 | ロ むくつけ女 | ハ 継母 |

(L) 次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

- イ 北の方は対の君の幸せを願って、入内させるよりも権勢ある上達部との結婚を提案した。
- ロ 中納言は、継母が対の君への悪意のこもった計画を進めていることに気づいていない。
- ハ 中納言は、姫君のもとに通っている法師がいるという北の方の言葉をすぐに信じて不安になった。
- ニ 三の君の乳母は、北の方から相談を受け、対の君を陥れるための偽装に喜んで協力した。
- ホ 六角堂の法師は、三の君の乳母から依頼されて対の君を訪ね、そこから出てくる様子を演じた。